Japan Epilepsy Society

A－21 抗アレルギー剤が有効であったアレルギー合併小児てんかんの検討

日本大学医学部小児科

藤田之彦、山森裕之、山崎弘貴、小平隆太郎、橋本光司、渕上達夫、大久保修、原田研介

我々は、小児てんかんとアレルギーとの関係、小児てんかんにおける免疫学的発症機序、小児てんかんの免疫グロブリン療法について発表してきた。近年、気管支喘息の治療に用いられるテオフィリンの投与中にみられるテオフィリン関連痙攣、抗ヒスタミン剤や抗アレルギー剤による痙攣誘発が話題になっている。だが、これとは反対にアレルギーが合併している小児てんかん児に対し抗アレルギー剤の投与により痙攣が消失することを時々経験する。今回、抗アレルギー剤が有効であったアレルギー合併小児てんかん３例について検討する。症例1は9歳の男児、症候性局在関連性てんかん、二次性全般部分発作である。症例2は14歳の女児、潜因性局在関連性てんかん、二次性全般部分発作、症例3は7歳の女児、潜因性局在関連性てんかん、二次性全般部分発作の３例である。アレルギーは、症例1、2は蕁麻疹とアトピー性皮膚炎、症例3はアレルギー性鼻炎と結膜炎を有する。3例ともてんかんを発症し抗てんかん剤などが投与されていた。抗てんかん剤を投与するもてんかん発作は消失せず、多剤併用療法が行われた。てんかん発作とアレルギー症状の悪化を認めたため、抗アレルギー剤（テルフェナジン1例、ペミロラストカリウム2例）が投与された。抗アレルギー剤開始後２例は完全に痙攣発作は消失し、１例も著しく減少した。現在アレルギー合併小児てんかんにのみ抗アレルギー剤を使用しているため、抗アレルギー剤にてんかん発作の抑制作用があるかどうかは不明である。抗アレルギー剤にてんかん発作の抑制機序は、ペミロラストカリウムは酸性抗アレルギー剤であり抗ヒスタミン作用が弱いこと、また抗アレルギー剤の抗chemical mediater作用が発作に何らかの形で抑制性に作用したなどが考えられる。今後さらに症例を増やし、臨床的事実に基づきその作用機序を検討する必要がある。

A－22 難治てんかんに対するclorazepate dipotassiumの有用性と問題点：１５０例の検討

A

国立精神・神経センター武蔵病院小児神経科

○須貝研司、花岡　繁、佐々木征行、福水道郎

【目的】難治てんかんに対するclorazepate dipotassium(CLZ)の有用性、副作用、耐性とその対策について検討した。
【対象と方法】通常の抗痙攣剤３剤以上（平均6.1剤）に難治な例で、同意を得て、CLZを0.3-1mg/kg追加または置換し、1-2週ごとに0.2-0.5mg/kgづつ最大2.5mg/kgまで増量し、4週間以上投与したLenox-Gastaut症候群(LGS)29、West症候群／West症候群から変容した症候性全般てんかん(W/SG)15、他の症候性全般てんかん(SGE)14、特発性局在関連性てんかん(ILE)5、症候性局在関連性てんかん(SLE)81、未決定てんかん(UE)6（乳児重症ミオクロニーてんかん5)、計150例を検討した。4週間以上投与の初期効果と6ヶ月以上投与できた86例の長期効果を、痙攣消失、80％以上減少(著効)、50％以上減少(有効)、50％未満の減少(無効)とし、初期に有効以上で後に無効例を耐性とした。
【結果】①初期効果は、消失33、著効28、有効46、無効43で、LGS(1, 7, 8, 13)、W/SG(2, 2, 6, 5)、SGE(4, 2, 7, 1)、ILE(1, 1, 1, 2)、SLE(25, 14, 20, 22)、UE(0, 2, 4, 0)であった。投与量(mg/kg)は、効果順に0.9±0.4、1.0±0.3、1.1±0.5、1.1±0.4で差はない。②長期効果は、消失20、著効19、有効32、無効15で、LGS(0, 4, 4, 4)、W/SG(1, 1, 4, 3)、SGE(2, 3, 4, 1)、ILE(1, 0, 0, 0)、SLE(16, 11, 16, 4)、UE(0, 0, 4, 1)。③発作型別初期効果は、単純・複雑部分(33, 21, 13, 30)、二次性全般化(31, 3, 13, 11)、SLEによるものも含む強直(9, 16, 26, 27)、全般性強直間代(3, 4, 3, 8)、非定型欠・ミオクロニー・間代・脱力(10, 5, 7, 30)、tonic spasm(2, 2, 2, 4)。④発作波では、焦点性(17, 11, 15, 15)、多焦点性(11, 12, 18, 16)、全般性(3, 5, 12, 12)、発作波なし(2, 0, 1, 0)。⑤副作用は47例延べ52件で、眠気30、痙攣増加、不活発各5、流涎、食欲不振各4、失調3、不随意運動1で、中止25、減量19、続行8。副作用の有無で投与量に差はなかった。初期量を減らし漸増することで副作用は減少。⑥有効以上100例中46例で耐性あり、2ヶ月以内22、4ヶ月以内13、6ヶ月以内6、1年以内2、1年以降3。継続し再び有効以上11/16、増量し再び有効以上13/26、すぐに中止4。
【結論】CLZは難治てんかんに有用で、長期効果もある。

NII-Electronic Library Service